

郷土博物館・文学館だより



展示室風景

現在、当館では1月9日（月・祝）まで企画展「家電に見る昭和の暮らしと渋谷」を開催しています。



昭和40年代頃の居間の再現展示

企画展

「家電に見る昭和の暮らしと渋谷」

高度成長期の1950年代、「三種の神器」として「テレビ（白黒）・洗濯機・冷蔵庫」が、もてはやされ、庶民生活の憧れとなりました。こうして普及していった家電は、それまでの住まいや食生活などのライフスタイルを大きく変化させ、今日の私たちの生活スタイルの基礎を築きました。

本展は、家電に焦点をあてながら、戦前の家電普及前と戦後の家電普及後の「昭和の暮らし」の変化について紹介しました。

戦前の生活用具として、ガス灯や氷冷蔵庫、火熨斗（ひのし）、戦後の資料としては、闇市で売られていたという電熱器をはじめ、冷蔵庫・テレビ・洗濯機・扇風機などを展示しました。

この他、昭和40年代の居間を再現した展示や、戦前戦後の玩具の展示などもあります。

開催中



展示解説風景

道玄坂むかし語り

渋谷駅の西側にある道玄坂の名前は、渋谷を代表する繁華な場所の一つとして、全国的に知られています。このにぎわいは昔からのものだったのででしょうか。

道玄坂の名前の由来には二つの説があります。一つは伝説的なもので、人の名前をとったといわれるもの、もう一つは寺院の名前に由来するといわれるものです。人名説は、江戸時代のさまざまな地誌が広く紹介しています。ただ若干の違いがみられ、一番有名なのが、鎌倉時代におきた和田義盛の乱のときに、敗れた和田一族の残党である「大和田道玄」がこの付近に隠れ住み、山賊になったというものです。このほか、戦国時代の大永年間のころに、「道玄太郎」という者が住んでいたというものもあります。

江戸時代には「道玄の物見の松」と呼ばれる有名な古木もあり、道玄が盗賊をするときに物見をしたと伝えられています。ただし、この松は、坂を登り切ったあとに続く下り坂、現在の目黒区にある松見坂沿いにあったといえます。その後、現在の道玄坂の途中にあった松にその名が移りましたが、その松も明治時代にはなくなりました。

もう一つの寺名説のもとになった寺院とは、「道玄寺」あるいは「道玄庵」といわれるものです。「道玄庵」については、『天正日記』天正18年（1590）9月23日条の「どうげんの庵室ゆいしよさし上る」がもとになっています。これによれば、江戸時代以前から「道玄」の名前があったことになりませんが、この史料の性質については疑問があるため、確実なことはいえ

ません。

いずれにしても、かつての道玄坂は、盗賊の伝説が生じるようなさびしい場所であったようです。実際、江戸時代の道玄坂の様子を描いたとされる絵画には、うっそうとした林の中を走る細い山道として坂が描かれています。

それでも、ここを通る道は大山道などと呼ばれる主要な道であり、古くから人の往来はあったようです。そのため、道沿いにわずかながらも町屋が形成され、「渋谷道玄坂町」と呼ばれるようになりました。江戸時代後期の文政年間には、十軒程度の家があったようです。

道の両側に家々が建ち並ぶようになるのは、明治時代も後半になってからです。坂に沿って明治40年（1907）に玉電（玉川電気鉄道）が開通したころには、街としてのにぎわいもみられるようになりました。

盗賊が出るような山道であることを想像しながら、あらためて道玄坂を散歩してみるのはいかがでしょうか。



明治時代末期の道玄坂（『東京名所図会』明治44年）
現在のシブヤ109付近から坂上方向をみたところ



美貌の歌人・今井邦子と渋谷

歌人・今井邦子（明治 23-昭和 23）は、徳島県徳島市に生まれ、父の出身地の長野県下諏訪で育ちました。18歳の頃に『女子文壇』に詩歌を投稿、上京して中央新聞社の記者となり、明治 44 年（1911）には同社政治部にいた今井健彦と結婚します。その後『アララギ』の会員となり、諏訪出身の島木赤彦に目をかけられたこともあって、歌の才能が開花します。

邦子はその美貌でも知られ、高村光太郎は大正 5 年（1916）に邦子をモデルにした彫像（写真のみ現存）を試作しています。これに対し邦子は「人の手によって表してくれたものの中で真実の自分をみたものは唯一つ彫刻家高村光太郎の手による塑像だけである」（『婦人画報』大正 8 年 6 月号）と書いています。それは、その美貌と当時の女性にしては積極的な性格ゆえに、男性文士とのゴシップを書き立てられた邦子の心の叫びでもありました。

『アララギ』で同門だった歌人・杉浦翠子も邦子を指弾した一人で、『彼女を破門せよ』（昭和 8 年 藤浪会）では、主人公を翻弄する魔女的な存在として邦子を描いています。

ところで、邦子は上京後まもなくの明治 43 年、作家・水野仙子と代々木初台で共同生活をおくります。当時の様子は、『姿見日記』（大正元年 女子文壇社）の中に「丘の家の日記」と題して「追分で電車を降りてうろおぼえの道を私は私の家をさがしつゝ歩きだした。二三度畑の人に聞いてやつと心覚えの代々木の御料地の

垣を見付けだした。まづ嬉しかった。と、ほつとして向うを見る、緑の柔かさうな丘、其丘にまばらに建てられた家々。あの一つに今日から私は住むのだ！」と書いています。この生活はすぐに行き詰まって麹町に転居しますが、大正 2 年、邦子は再び渋谷地域に戻ります。代々木山谷や千駄ヶ谷に居を変えながらも住み続け、当地を詠んだ歌を何首も残しています。

三度目の木枯の風吹き通る代々木原遠き甲斐ヶ原に雲凝りてあり（『紫草』昭和 6 年 岩波書店）
初台の丘の上なる南瓜の花昔語てなつかしまむか（『明日香路』昭和 13 年 古今書院）

夫の健彦が三度目の衆議院議員当選を果たした昭和 5 年（1930）には、鳩森八幡神社近くの千駄ヶ谷 527 番地に居を定めます。

赤彦の死後、邦子は斎藤茂吉の指導を受けながら独自の作風を確立しました。昭和 11 年（1936）には、女性による短歌会を主宰して、大らかな女性の秀歌を収めた『万葉集』の心を受け継ぐべく、歌誌『明日香』を創刊し、戦前の歌壇に一時代を築きました。

『茜草』
アララギ叢書第 60 編
昭和 8 年 古今書院
今井邦子の随筆集。「元旦風物」や「引越す家」、「若葉期の連想」などには、邦子の代々木や千駄ヶ谷での生活がえがかれている。高村光太郎による邦子の彫像の写真も挿入されている。





収蔵資料紹介

「通い德利」

陶器（瀬戸・美濃系）
器高 [19.4cm]
底径 8.3cm
最大径 8.7cm

大人の嗜好（しこう）品で、これからの時期、飲む機会が多くなるものといえればお酒ではないでしょうか。

現在、日本では世界中のお酒が、ガラスの瓶（ボトル）やアルミ缶、あるいは紙パックの容器などに詰められ、売られています。しかし今から百年くらい前までは、まだガラス瓶が普及していなかったため、街の酒屋さんはお酒（日本酒）を陶器の德利に入れて売っていました。つまり酒造元から届いた酒樽のお酒を、自分の店の德利に詰め替えて売っていたのです。酒屋さんはひひきにしてもらえるよう、德利に自分の店の「名前・「屋号」「や」商標「などには「電話番号」なども書いて、お酒を買いにきたお客様に貸し出していました。飲み終われば、その德利をその井浜店に持っていくればよかったです。そ

の使い方から「通い德利」と呼ばれていました。江戸時代も同じようにお酒は德利に入れて売られていましたが、德利には焼いた後に、釘を使って刻字や刻印（「釘書き」）したものを主に使っていました。

写真の資料は、鉢山町・猿楽町一七番遺跡第五地点から出土した德利です。「富士善」と商標「加」、電話番号「芝電 六三二一」が記されています。『東京横浜職業別電話名簿』（弘益社 一九一七）を調べてみると、そのなかに「芝 六三二一 富士屋 加藤善太郎 豊、中渋谷二〇三（罐・薪）」とあります。「富士善」はお店と店主の名前からきているようです。この店の場所は渋谷駅のすぐ近く、現在の桜丘町のあたりでした。今も子孫が酒屋を営んでいますので、街の酒屋さんの歴史を感じさせるのを感じます。

【今後の展示予定】

企画展「家電に見る昭和の暮らしと渋谷」

開催中 平成24年1月9日（月・祝）まで

特別展「渋谷に残された版木」

平成24年1月21日（土）～3月20日（火）

江戸時代の国学者・塙保己一とその子孫の業績を紹介します。

「渋谷現代短歌優秀品作展示」

平成24年4月1日（日）～4月15日（日）

*第12回渋谷現代短歌の優秀作品を展示します。

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 9:00～17:00（入館は16:30まで）

※震災に伴う節電を継続し、開館時間を13:00からに変更しています。詳細については、お問合せください。

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※ 60歳以上の方、障害のある方と付き添いの方には無料

お問合わせ ◆ 東京都渋谷区東1丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.18

平成23年12月1日発行